共生委員会ニュース

ともしび

2024 年度 第 2 号

2024 年 10 月

共生探究学習委員会



カナダホームステイのようす

秋のグローバルウィーク開催！

9月24日（火）～27日（金）、高等部生が様々な形で〈他者〉と向き合う「グローバルウィーク」が開催されました。

礼拝のお話に加え、昼休みには各種イベントも行われましたので、プログラムをご紹介します。

9月24日（火）

礼　拝：K.M.（3年・東ティモールツアー）

昼休み：東ティモール「フェアトレードコーヒー試飲会」【ウッドデッキ】

9月25日（水）

礼 拝：S.A.（3年・ボランティア部）

昼休み：ワークショップ「受刑者の方々にバースデーカードを届けよう」

【小教室北C】

9月26日（木）

礼　拝：C.M.（3年・宮古訪問）

昼休み：BLUE PECO「ユースサミット2024報告会」【小教室北 A】

宮古「文化祭チャリティーグッズ再販・プログラム紹介」

【2階ロビー】

9月27日（金）

礼　拝：K.T.（3年・カナダホームステイ）

昼休み：ボランティア部「やさしい手話教室」　【小教室北C】



ブルーペコ　報告会



チャリティーグッズ再販

特集①ボランティア部 炊き出し活動

居場所がない？

２ 年 O.Y.

私はものすごく悔しくなりました。

初めて寿町の炊き出しに参加して、日本には居場所がない人に対する偏見が強く根付いていること、また、私も世論に流されている１人であったと気づいたからです。それだけではありません。寿町で長年活動されている方のお話を通して、それぞれの人にバブル崩壊等の社会の変化で仕事を失いざるを得なかった理由があることや、交流していく中で、私たちと何も変わらない１人の人間であり、心の温かさ、尊厳を持っていることを知りました。

他にも沢山の発見がありました。当日は35°を超える猛暑日にも関わらず、100人以上の人が列になって並んで待っていました。最初私は即席のご飯やバナナを渡すお土産渡しを担当しました。皆さん１人１個ずつ順番を守って貰い、ありがとうと感謝を伝えてくださいました。誤って2つ渡してしまった時には黙って受け取るのではなく、もう貰ったよと教えてくれたり、食べ終わった人の食器を回収していた際にはご馳走様、ありがとうと再び感謝の言葉をかけてくださいました。私の中の偏見が解消された瞬間でした。

今回は雑炊を作りました。ボランティアさん達に視点を向け、なぜ夏に熱い雑炊を配るのか尋ねると、普段お店で買った冷たいものを食べている人に温かい手料理を食べて欲しいからだと分かりました。他にも様々な工夫をしながら猛暑の中、効率よく動かれている姿が沢山あり、炊き出しを長年続けられている方々の努力や信念の強さが伝わってきました。お忙しい中、私達にも寿町の歴史から野菜の切り方、配給の仕方などを丁寧に教えていただき、感謝しかありません。

偏見が解消された一方、様々な課題があることも学びました。私が今まで「居場所がない人」と呼んできたのは、「ホームレス」とは状態のことを表しており、路上で生活する人以外にもずっとネットカフェでずっと過ごす人、自分が心地よく居られる居場所がない人も含んでいることを知ったからです。日本には隠れているだけでホームレスに陥っている人が大勢いるのです。また、 路上で暮らす人に対して暴行する事件があることや、異常気象により外での生活が困難になること、しっかりとした医療手当を受けられないといった、深刻な問題があることを再確認しました。

私は地球、世界といった大きなことばかり考えていて貧困が目の前にあることに気づけずにいました。まずは自国に目を向け、今は居場所がなくても何十年か前、間接的に日本や私達を支えてくれた方々に恩返しするために、生きやすい世の中にするために現状の深刻さを受け入れ、社会で働きかけていく必要があると感じました。

私は実際に行ってみないと分からない、会ってみないと分からない体験をしました。SNSが普及している今、情報を上手く発信、受信する力が必要とされています。だからこそ最初にできることは、自らの経験から正しい情報を広めることだと考えました。家族や、友人など身近な人に伝えていくことで、偏見の認識と深刻さの共有に繋がります。炊き出しボランティアの方もおっしゃっていたように、いずれ日本中、世界中で炊き出しをしなくても良い、そんな世の中が実現することを目標に、自分から働きかけていきたいです。

特集② 東ティモールスタディツアー

「ティモール人の心の豊かさ」

２年 M.A.

私は今年の夏休みに東ティモールスタディツアーに参加しました。東ティモールは 2004年に独立したばかりの、アジアで最も新しい国です。私が訪れたレテフォホという村では、コーヒー生産に適した気候を活かし、より品質の良いコーヒーを高値で売るための努力を重ねていました。私も地域の農家さんと一緒にコーヒーチェリーの収穫をさせていただきました。農家さんは、急な斜面の中を自分の足で動き、一つ一つ手で摘んでいきます。農家さんの子どもたちとも一緒に作業をしたのですが、子どもたちは、まだ幼いのに工程を全て完璧に覚えていて、ふだんから家族の仕事を手伝っているのがよくわかりました。そこから、コーヒー産業が経済的に東ティモールを支えているだけでなく、それによって強い地域ネットワークが完成されていることに気が付きました。

そして、私が１番心に残っているのはティモール人の温かさです。私が村人とすれ違うときに、ほとんどの人が挨拶をしてくれて、車で村を通り過ぎるときでさえも、明らかに違う国から来た自分たちに対して優しく微笑んでくれました。東京で知らない人に挨拶する人を見たことがないし、自分でもしたことはありません。しかし東ティモールでは知らない人でも挨拶するのが当たり前で、それがすごく温かい文化だと感じました。また、東ティモールの子ども達からは大きなパワーを貰いました。たしかに、東ティモールの教育環境は、日本と比べても良いとは言えません。１つの教室に2学年の生徒がいて、１人の先生が2つの授業を同時に行っています。生徒たちは細身の子が多く、給食はご飯と少量の野菜のみという簡素なものです。しかし、彼らのキラキラした笑顔には、経済的な貧しさではなく、心の豊かさが溢れていました。私が話すカタコトのテトゥン語を聞いて頷いてくれる姿、バイバイするときに脚に抱きついてくる愛嬌全てに心を奪われました。

私が東ティモールに行って感じたことは、人の温かさは人を幸せにするということです。現地で出会う人は皆、こちらまで笑顔になるほど輝いた表情をしていました。先進国と言われる日本から来た私を親切に受け入れてくれたように、ティモール人はお互いに助け合って生きています。地域の人が苦しんでいるなら無償の愛で助ける心の温かさが、東ティモールの国民性を創っているのだと知りました。私も、貧しさの中にある心の豊かさを見つけ出せる人になりたいです。



東ティモールツアーにて



宮古市の名勝・浄土ヶ浜（次ページ記事）

特集③ 宮古訪問プログラム

「宮古で感じた震災の現実」

3年 N.T.

2024年8月7日～9日、宮古訪問プログラムに行ってきました。

1日目は最初に浄土ヶ浜に行き、海鮮丼を食べたり遊覧船「うみねこ丸」に乗ったりしました。その後に「学ぶ防災」を行いました。防潮堤に実際に立ってみて、今自分が立っているところも津波が到達していたのだと気づき、自然災害の恐ろしさを実感しました。また、防潮堤によって海が見えなくなってしまうことの是非などについても深く考えさせられました。たろう観光ホテルで社長さんが撮影した津波の動画を見たときはメディアで取り扱われているような映像とはリアリティが全く違って、直前まで人が歩いていたところが数秒後には海になっている様子を目の当たりにしてこの震災遺構を今後も必ず繋いでいき、生きているうちに誰でも必ず一度は見るべきものだと思いました。

2日目の午前中は岩手県立宮古高校を訪れました。宮古高校の生徒9人がそれぞれの震災の話をしてくれたのですが、その中でもヨット部に所属している生徒が話してくれたことが印象的でした。その生徒は津波によって家が流され、一年間仮設住宅で過ごしていたといいます。それでも今は海に親しみを持ってヨット部として活動していて、私達にも海を恐れないでほしいというメッセージを伝えてくれました。宮古の人たちにとって海は大切なもので、津波の危険があっても親しみを持って恐ろしさを理解しながら共生していくことが求められているのだと思いました。

午後にはまずわかめの茎取り体験を行いました。最初は難しかったのですが、段々と慣れていってたくさん茎を取る事が出来ました。私たちが普段食べているわかめも働いている方々の努力があることを知りました。

その後、災害公営住宅の方々にお会いしてレクリエーションをし、震災のお話を聞きました。私がお話を聞いた方は震災が起きた当時は何が起きたのかわからず、とにかく旦那さんに言われるがままに行動したそうです。一番お話で心に残っていることは「命が一番大切」ということです。とにかく自分の命を守って、そうすれば後で家族にも友達にも会えるかもしれないというお話を聞き、命の尊さを改めて実感しました。

3日目にはまず宮古市長を訪問しました。震災が起きた街の行政に関する貴重な話を聞くことができ、さらに危機管理課の災害が起きた時に使用される放送設備も見せていただきました。「地震の死傷者を0人には出来ないが、津波は0にできる」という言葉を聞き、災害が起きた時にすぐに適切な行動が出来ることの大切さを1日目と2日目に聞いたことと重ね合わせてより感じました。その後はみやっこベースという宮古市の子供の居場所として提供されている施設でみやっこベース代表の早川さん、Art Eriy's 代表の盛岩さんとお話をしました。私は文化祭実行委員会に入っていることもあり、盛岩さんとメインでお話させていただいたのですが、最初にはずっと絵を仕事にしていけるのか不安だったけれど震災を機に地域復興のため活動していくことを決心したそうです。私も絵を描くのが好きなのですが、ここまで信念を持ってやっていることには本当に感銘を受け、勇気づけられました。

3日間という短い期間でとても多くのことを私たちは学ぶことが出来たと思います。この経験を決して無駄にすることなく、東日本大震災から10年以上経った今こそもう1度、真剣になって語り継いでいかなければいけないと使命感を感じています。皆さんも3月11日には東北のことを考えてみて欲しいです。そして 1、2年生は来年ぜひ宮古訪問プログラムに参加してみて下さい。